

能登半島地震 JMAT^{*1}活動

部会員 平沼 昌弘

ひらぬま まさひろ

埼玉石心会病院
危機管理対策課

能登半島地震により被害を受けられた皆さまにお見舞いを申し上げますとともに、一日も早い復興をお祈り申し上げます。

2024年1月中旬、JMAT 埼玉県隊として現地に入れないかとの連絡が入った。数日中の出発の可能性もあったが、埼玉県隊として計画的にチームを投入することとなり、2月4日の現地入りとなった。出発まで3週間程度確保できた点は、準備に恵まれたチームとも言える。

自分は、チームの行程、車両、資機材を担当した。自分の目標は、チームを無傷で連れて帰ること。報道、Web などさまざまな情報を集めたが、最も有益だったのは、埼玉県の先発隊、当時すでに活動中であったチームからの情報であったことは言うまでもない。

JMAT には標準携行品が定められているが被災状況や地理、気象など状況に応じた対応が必要となる。準備に越したことはないが、まさに平時のあり方（備え）を考えさせられる。直前まで活動地域が決まらず、どの地域になっても対処できるよう能登半島中部に活動拠点を確保した。JMAT の活動は、自己完結が基本となる。出発時点で一部地域の断水を除き、ライフライン、通信は保たれていた。現地で食料調達も可能であったが、食事、就寝、排泄、ゴミに至るまで全て自前で完結できるよう準備した。実際、活動期間中は余震にも見舞われ、常にライフラインが途絶えるリスクを想定しながら活動しなければならなかった。

当初は、支援 JMAT 隊として能登半島中部や北部で活動する予定であったが、出発直前に統括 JMAT として JMAT 本部（石川県庁）で活動することとなり石川県庁に入った。本部では、3チームに分かれて支援 JMAT 隊の部隊統制・ブリーフィング・情報収集に当たった。自分は、情報収集担当として支援 JMAT 隊から送られてくる活動報告を基に施設カルテを作成した。避難所など施設単位で緊急度、優先度を定め、翌日以降の支援 JMAT 隊の配置、部隊数などを決定した。支援 JMAT 隊は 30 チームほどが活動していたが、都道府県ごとにチームの入替えや活動日数も異なるため、活動

隊の数は毎日大きく異なった。能登半島北部や中部エリアで活動しているチームもあったが、金沢市内はじめ金沢以南に多数の被災者が一時避難し、避難生活が長期化する中で新たな課題も生じている状況にあり、南部での活動強化へ転換する時期でもあった。

活動を終え1年が経過した。チームを無傷で連れて帰るという自分の目標は達成されたが、活動で得たものは大きく、いまだ答えは見つからない。「支援」災害時間軸の何処かに合致するのかもしれないが、被災地に対する JMAT 隊員の思いが皆同じであればこそ、この言葉の意味を考えさせられる。チームによって助言や対応が異なる、引継ぎが上手くできていない、現場の希望と異なる・・・活動が空回りしているように感じる場面もあった。「寄添う気持ち」当然に理解していたつもりが、すっかり忘れていた自分に気づかされた。被災地で何か成し遂げてくなど結果を求めていた自分を恥ずかしく思う。今回の活動は、CSCATTT^{*2}の最初のCである。ハードの備えは万全でも気持ちや感情といった部分は容易でない。自分がすべきことは、現地から持ち帰った沢山の反省や思いを自院に落とし込むこと。JMAT の活動は続く。◀

【編註】

*1：JMAT (Japan Medical Association Team 日本医師会災害医療チーム)：災害発生時に、被災者の生命および健康を守り、被災地の公衆衛生を回復し、地域医療の再生を支援することを目的とする災害医療チーム。主に初動の急性期対応を行う災害派遣医療チーム (DMAT Disaster Medical Assistance Team) の撤退後、活動する。

*2：CSCATTT：災害医療従事者の行動基盤となる7つの基本原則の頭文字。Command and Control (指揮と連携)、Safety (安全確保)、Communication (情報収集伝達)、Assessment (評価)、Triage (トリアージ)、Transport (搬送)、Treatment (治療)



写真 能登半島地震で活動するJMAT埼玉県隊